

歴史の復元と文化の創造

—ウズベキスタンと日本のつながり—

上 川 通 夫

まえがき

この小文は、2019年8月26日(月)に、ウズベキスタン共和国サマルカンド市で開催された、同国とユネスコとの共催による国際学会「有形および無形文化遺産の保存：現在の問題とそれに対する戦略」での報告原稿である。国際会議の趣旨に沿って研究構想の一部を示したエッセイであり、学会参加記としてここに掲載させていただく。この会議への参加は、同年7月8日(月)にタシケント市において、鮎京正訓理事長や久富木原玲学長らとともにカモラ・アキロヴァ同国文化担当副大臣と懇談した折、会議の予定を知らされると同時に発表者として招聘されたものである¹⁾。

国際会議には、ウズベキスタン共和国シャヴカト・ミルズィヤエフ大統領が出席し、同国文化省・情報技術通信開発省・観光開発国家委員会・科学アカデミー・外務省その他が関わる本格公式行事で、70余か国からの参加者が集まった²⁾。国際会議の趣旨は、ウズベキスタンをはじめとする中央アジアにおける都市開発の急速さの中で、長い歴史で培われた文化遺産の保護・継承というユネスコの原則を確認しつつ、その前提となる調査とデータ集積への先進ICT駆使を重視し、その成果を都市開発プログラムに組み込むことを意図し、これまでの世界各国での経験を紹介し合おうというものであった（事前に送られて

1) 懇談には、鮎京理事長、久富木原学長、岡田眞治愛知県立芸術大学美術学部長、柴崎幸次同教授、愛知県公立大学法人戦略企画・広報室坂井麗主事、上川が同席した。一行は、7月7日に開催された第3回日本・ウズベキスタン学長会議への参加のために渡航したものであり、あわせてこの機会に副大臣との懇談を設定した。なお懇談にはタシケント在住のティンチュリナ・ダミラさんが通訳にあたられた。

2) 正確な参加国数、参加者数は不明である。

きた説明書による)。

会議は3つの分科会で行われた。第1分科会「近代文化の価値体系における有形・無形遺産：研究および復元の実践」、第2分科会「有形・無形文化遺産の保存の政治的、法的、社会経済的的局面」、第3分科会「文化遺産の保存における情報技術」であった。ただし、分科会のテーマと報告内容は必ずしも整合しておらず、私の報告は第2分科会で行った。なお第2分科会では丸山裕美子本学日本文化学部教授が、第3分科会では柴崎教授と久富木原学長が、それぞれ報告された。口頭報告は4人とも英語である。

また、26日の国際会議を含めて、主催者ウズベキスタン共和国によって2日から27日が「遺産週間」と位置づけられ、「ウズベキスタン、偉大なルートと文明の交差点：帝国、宗教、文化」をテーマに、タシケント市（22日、23日）とテルメズ市（24日、25日）でも国際会議が開かれ、テルメズ市では遺跡巡見も組み込まれた。上川は柴崎教授とともにこれに参加した。

以下には、あらかじめ作成した日本語での原稿と、口頭報告した英語原稿とを、あわせて掲載する。当日時間の都合で省略した部分を元に戻した。また日本語には、あらたに必要な注を付した。

英語原稿作成に際しては、本学教養教育センター所属の英語教員ジョシュ・ブルノティ准教授にさまざまなご教示をいただいた。また、国際学会への参加に関しては、名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院ウズベキスタンサテライトキャンパスの今村栄一氏と、ティンチュリナ・ダミラさんからは、ひとかたならぬお世話になった。心からお礼申し上げる。

1 ウズベキスタンと日本の歴史的関係を問う

現在の日本人の多くは、ウズベキスタンを次のようにイメージしていると思われれます。それは、古くから栄えたシルクロードの西側にある遙かに遠い憧れの土地、というものです。つまり日本人は、ウズベキスタンには長い歴史があると理解しています。この理解は正しいものです。同時に日本人は、ウズベキスタンと日本とは関係が薄いと考えています。それは、はっきり言って、日本人の誤解です。私の発表は、日本人の常識をあらため、古くからの歴史におい

て、ウズベキスタンと日本のつながりを見いだすことにあります。

ウズベキスタンについては、紀元前にさかのぼる歴史が確認されています（小松久男編 2000；田辺勝美他編 1999）。日本については、2000年ほど前から、文字史料に関係記事が登場します³⁾。常識的には、両国の歴史は別々です。しかし、古い時代に、関係はなかったのでしょうか？

たとえば、アフラシアブの宮殿跡から発見された7世紀の壁画には、ユーラシア各地からの訪問客が描かれています。その向かって右端には、アフラシアブに向かう朝鮮人2人がいます。私の目はここに釘付けされました。朝鮮人の右側、狭い海峡を隔てた東側には日本列島があります。その地に住む人は、この壁画に描かれていません。しかしこのことは、かえって私の探究心をかき立てます。

2 仏教を介したつながり

私は、考察の手がかりを仏教史に求めてみます。南アジアに発した仏教は、中央ユーラシアから東アジアにかけて、かつて共有されていました。日本では、6世紀に初めて導入され、12世紀には社会に浸透しました（上川 2007, 2012）。現在、日本人の多くは仏教徒だと自覚しています。ただ、敬虔な信者は少なく、仏教を知らない仏教徒が多数です。

紀元前4世紀ごろに芽生えた仏教は、紀元1世紀から、今のウズベキスタンを含むクシャン朝で発展しました。日本列島には、6世紀中ごろに、朝鮮半島の百済からもたらされました。百済は、中国梁から入手した仏教を、倭（当時の国号）に送ったのです。仏教の経典は、中国語で書かれています。ヤマトでは仏典を通じて、文字言語を学ぶことになりました。また同寺に、医术や薬学などの先進文化を入手しました。仏教は、総合的な文化の一部だったのです。また、特に『涅槃経』の伝来が、記録されています⁴⁾。この経は、すべての人々は仏になる可能性をもつ、と説いています。この時代、朝鮮半島や日本

3) 『漢書』地理志に「倭人」とあるのが初見で、紀元前1世紀頃のこととされている。

4) 『日本書紀』欽明天皇6年（545）9月条。百済王から倭王への造仏願文の中に「普天下、一切衆生皆蒙解脱」とある。後半は『涅槃経』の趣旨に相当する。

列島では、葛藤の中で諸国家が自立してきました。仏教は、対立を融和するための、いわば国際関係における共通文化でした。

このような仏教の知恵は、ソグド人などが住む、中央ユーラシアの歴史から強調されたものです。日本の古代や中世に発達した仏教について、そのルーツをインドに探すと、あまり実感がつかめません。初期のインド仏教は、経典や仏像を作らなかったからです。

ところがクシャン朝では、仏像や経典によって、思想が身近になりました。仏や菩薩たちは、戦争や飢餓に悩む人々に向かって、生きる意味と慈悲の心を示しました。不殺生、慈悲、智慧（深い理解）、和合（連帯）、布施（相互扶助）、といった理念も掲げました。

日本に伝わった経典の一つに、『無量寿経』があります。この経典は、阿弥陀如来による救済や、極楽世界の華やかさを説明しています。クシャン朝で生まれたと推定されています。注目すべきことに、経典の冒頭には、中国語に翻訳した人物として、サマルカンド人の康僧鎧の名前が記されています。252年に、中国の洛陽で訳したと伝えられています。今日の研究によると、実は、5世紀に別の人物が訳したようです。しかしサマルカンド人に仮託されて、広く知られていたのです。そして、ヤマトでは、640年と652年に王の命令で講義されています⁵⁾。その後、12世紀には、日本仏教を代表する経典となっています。このことは、日本仏教ないし日本史と、ソグド史ないし中央ユーラシア史とが、間接的に連動していたことの一事例です。

3 翻訳・編集と思想の力

仏教史には、世界宗教として発展する上で、いくつかの画期がありました。紀元前4世紀のシャカは、思想を言葉だけで伝えました。ついで紀元前3世紀、マウリヤ朝を統一したアショカ王は、シャカの教えを文字にして編集させました。つまり経典の成立です。その頃は、複数の言語で記されていたようです。

5) 『日本書紀』には、舒明12年(640)に入唐僧惠隠が説き、孝徳天皇白雉3年(652)には惠隠と惠資が内裏で講論して1,000人の僧が聞いた、と記している。

紀元3世紀には、クシャン朝のカニシカ王が、経典をサンスクリット語で統一させました。そして仏典は、ソグド人を含む中央ユーラシア往来者たる僧や商人たちによって中国に運ばれ、同じ人たちによって中国語に訳されました。ソグド人のユーラシアでの活躍時代と、仏典の中国語翻訳時代は、ほぼ重なっています。4世紀から7世紀がその中心です（森安孝夫 2007, 2015；曾布川寛・吉田豊編 2011；荒川正晴 2010）。

中国では、7世紀の唐王朝の時代に、ほぼ仏典の中国語訳を終えています。その数は1万巻ほどあります。皇帝はそのうちの約5,000巻を公認しました。この一大仏教叢書は、一切経（大蔵経）と呼ばれています。仏教の書物ですが、そこには、哲学、文学、医学、薬学、建築技術など、多様な文化が含まれています。8世紀以後の日本では、この叢書が何セットも書写されました。このようにして日本人は、多様で豊かな文化を学んだはずですが、最初は貴族層からですが、12世紀には日本社会に広がっていました（上川通夫 2008）。

その場合、特に、仏教に含まれる人類の英知を学んだことが重要です。たとえば、不殺生、慈悲、智慧、和合、布施などはその核心です。今日の日本人は、不殺生、慈悲などの言葉を、仏教用語だと知らずに、生活の言葉として身につけています。つまり、価値ある思想は、国境や民族を越えて、仏教さえも越えて、学び取られたのです。

ソグドの地で明確にされた考え方は、ユーラシアの中央から東アジア、そして日本列島へ、受け継がれました。そこには数世紀の年月と、複雑な歴史が介在しています。その意味で、仏教をめぐるウズベキスタンと日本の関係は、間接的です。しかし間接的な継承関係は、時代や社会の複雑さをくぐり抜けて生かされたという、思想の力を意味しています。

ところで世界史には、12世紀ルネサンスという概念があります（ハスキンズ 1997；伊東俊太郎 1993）。ギリシャ・ローマの古典文化は、イスラム世界を経由して、12世紀にヨーロッパへ伝えられました。12世紀ルネサンスには、翻訳という知的作業がありました。一方、中央ユーラシアの人々は、南アジアの古代思想を、中国語で東アジアに伝えました。その経緯は、いわば中央ユーラシアルネサンスです。

4 思想の生命力を求めて

日本の仏教は、独特の内容をもっています。しかし普遍的な思想は、時代と距離をくぐって生きるに違いありません。先ほど私は、クシャン朝で明確化された仏教思想が、今日の日本でよく知られていると述べました。不殺生、慈悲、智慧、和合、布施などです。例えば不殺生の理想を掲げたことは、今日の世界情勢に照らして考えても、絶大な意味があります。日本人は仏教を知らない仏教徒ですが、そのことがかえって、特定の立場を越えた理想を支えているのかもしれません。平和と連帯を人類に呼びかける、という理想を掲げる日本国憲法の存在も、ユーラシア規模での歴史にも裏づけられているようです。

しかし今日、もちろん日本でもウズベキスタンでも、このような理想は充分に実現していません。戦争、殺戮、頽廃、分断、自民族中心主義などは、「グローバル時代」の特徴ですらあります。このような時代に、あえて私は、ウズベキスタンと日本との関係史を復元し、その実像を両国人の常識にしたいと考えています。歴史を踏まえ、理想と課題を将来に探る協力関係は、国際関係を先導するほどの意味をもつと考えます。

Possibilities of Mutual Understanding for “New” Culture:

A Perception of the Historical Relations between Uzbekistan and Japan

Michio KAMIKAWA*

1 Asking about the historical relationship between Uzbekistan and Japan

Many Japanese seem to have the image of Uzbekistan as follows: It is a distant land of longing, to the west of the Silk Road. In other words, the Japanese understand that Uzbekistan has a long history. This understanding is correct.

At the same time, Japanese people understand that there is not much of a relationship between Uzbekistan and Japan. It is, to be clear, a misunderstanding of the Japanese. My presentation is about finding the connection between Uzbekistan and Japan in the actual history, in order to change the common sense of the Japanese people. Uzbekistan has a history that dates back to B.C (Komatsu (ed.) 2000; Tanabe/Maeda (eds.) 1999). As for Japan, related articles will appear in the literary history from about 2000 years ago. The common sense is the history of the two countries is separate. But in the old days, wasn't there a relationship?

For example, 7th century murals found in the ruins of Afrasiab's Palace depict visitors from all over Eurasia. At the right end, there are two Koreans heading to Afrasiab. My eyes were nailed here. On the right side of the Koreans, there is a Japanese archipelago on the east side that separates the narrow strait. People who live there are not drawn in this mural. However, this rather stirs up my inquiring mind.

* This article was reported at the International Conference on 'Preservation of tangible and intangible cultural heritage: topical issues and strategies to resolve them' which had held on August 26, 2019 in the city of Samarkand. This event had co-organized by the Government of Uzbekistan in Cooperation with UNESCO.

2 Connections to Buddhism

I would like to seek a clue to the discussion in the history of Buddhism. Buddhism originating in South Asia was once shared from Central Eurasia to East Asia. In Japan, it was first introduced in the 6th century, and penetrated into society in the 12th century (Kamikawa 2007, 2012). Today, many Japanese are aware that they are Buddhists. However, there are few devout believers, and many Buddhists do not really know Buddhism.

Buddhism, which emerged around the 4th century BC, developed from the 1st century AD in the Kushan period including now Uzbekistan. It was brought to the Japanese Archipelago from Baekje on the Korean Peninsula in the middle of the sixth century. Baekje had sent Buddhism obtained from China to Yamato (the state name at that time). The Buddhist scriptures are written in Chinese. Yamato's people came to learn the written language through the Buddhist texts. At the same time, they acquired advanced culture such as medical and pharmaceutical knowledge. So Buddhism was part of an integrated culture. In addition, the transmission of the "Nirvana-sutra" is especially well recorded. This sutra teaches that all people have the potential to become Buddha. During this time, on the Korean peninsula and the Japanese archipelago, nations had become independent through conflict. Buddhism was, so to speak, a common culture in international relations to reconcile conflict.

Such Buddhist wisdom was born from the history of Central Eurasia, where the Sogd people and others live. When we look for the roots of Japanese Buddhism in India, which had developed in the ancient and middle ages of Japan, we don't find much there. It is because the early Indian Buddhists did not make scriptures or Buddha statues.

However, in the Kushan period, Buddha images and scriptures started to become familiar. Buddhas and bodhisattvas showed the meaning of living and the heart of mercy to those who suffered from war and starvation. They also set forth principles such as non-killing, mercy, wisdom (deep understanding), unity

(solidarity), and mutual aid. One of the scriptures transmitted to Japan is the “Muryoju-sutra”. This scripture explains the salvation of Amida Buddha and the splendor of the paradise pure earth. It is estimated that it was created in the Kushan Period.

Notably, at the beginning of the scriptures, the name of Samarkand is written as the person who translated it into Chinese. His name is Kosogai. It is said that he translated it in 252 in China. According to today’s research, another person translated it in the 5th century. However, people in the world thought that it was translated by Samarkands. And in Yamato (later called Japan), the scripture was lectured on by the orders of the king. After that, in the 12th century, it had become a scripture representative of Japanese Buddhism. This is an example that the history of Sogd or central Eurasia was indirectly linked to the history of Japanese Buddhism or Japanese history.

3 Translation and editing, the power of thought

Buddhist history had several stages in its development as a world religion. Buddhists in the 4th century BC transmitted his thoughts only in words orally. Then, King Ashoka, who unified the Maurya dynasty in the 3rd century BC, made the Buddha’s teachings edited in writing. In other words, the scripture was established. That is the passage of the scripture. At that time, it seems that it was written in several languages.

In the 3rd century, Kings Kanishka of the Kushan Dynasty unified the scripture in Sanskrit. And the Buddhist scriptures were transported to China by monks and merchants who were Central Eurasia traffickers, including Sogdians, and translated into Chinese by the same people. The times when Sogd people played an active role in Eurasia and the time when the scriptures were translated into Chinese almost coincided. It is centered in the 4th to 7th centuries (Moriyasu 2007, 2015; Sofugawa/Yoshida (eds.) 2011; Arakawa 2010).

In China, during the Tang Dynasty of the 7th century, the Chinese translation

of the Buddhist text was almost completed. The number was about 10,000 volumes. The emperor authorized about 5,000 of them. This large Buddhist book is called *Issaikyo* (or *Daizokyo*), The Great Collection of The Great Sutra. They are Buddhist books, but they contain diverse cultural knowledge such as philosophy, literature, medicine, pharmacology, architectural technologies, languages and so on. In Japan since the 8th century, many sets of this collection have been copied. In this way, the Japanese must have learned a variety of rich cultural heritage. It was originally from the aristocracy, but in the 12th century it spread to Japanese society (Kamikawa 2008).

In that case, it is especially important to have learned the wisdom of humanity included in Buddhism. For example, non-killing, mercy, wisdom, harmony, giving alms, etc. are the core of it. Today's Japanese learn the words of non-killing and mercy as the language of life without knowing that they are Buddhist terms. In other words, valuable ideas are learned across borders and ethnic groups, even across Buddhism.

The way of thinking that has been clarified in the Sogd land has been passed from the center of Eurasia to East Asia and the Japanese Archipelago. There are many centuries of history and complicated history. In that sense, the relationship between Uzbekistan and Japan over Buddhism is indirect. But indirect inheritance means the power of thought, which has been passed through the complexity of the times and society.

By the way, there is the concept of the 12th Century Renaissance in the study of history (Haskinz 1997; Ito 1993). The classical culture of Greece and Rome was introduced to Europe in the 12th century via the Islamic world. During the 12th century Renaissance, there was an intellectual task of translation. Meanwhile, the people of Central Eurasia introduced the ancient ideas of South Asia to East Asia in Chinese. The process is, so to speak, the Central Eurasian Renaissance.

4 Exploring the vitality of thought

Buddhism in Japan has its own unique content. However, universal thought must live through age and distance. I mentioned earlier that the Buddhist thought found in the Kushan Dynasty is well known in Japan today: Non-killing, mercy, wisdom, harmony, giving alms, etc. For example, raising the ideal of not killing has immense meaning even in today’s world situation.

The Japanese are Buddhists who do not know Buddhism. Rather, it may support ideals that go beyond a particular position. The existence of the Constitution of Japan, which holds the ideal of calling for peace and solidarity, seems to be supported by the history on a Eurasian scale.

Today, however, such ideals have not been fully realized, of course, both in Japan and Uzbekistan. War, slaughter, decay, division, and ethnocentrism, are also characteristics of the “global age”. In such an era, I would hope to restore the history of relations between Uzbekistan and Japan, and I would like to make the reality a common sense of the two peoples. Based on history, we believe that cooperation that explores ideals and problems in the future has the significance of leading the international relations.

参考文献 References

- Arakawa, Masaharu. 荒川正晴 2010. 『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』, 名古屋, 名古屋大学出版会
- Haskinz, Charles Homer. チャールズ・ホーマー・ハスキンズ 1997. 『十二世紀ルネッサンス新装』, 東京, みすず書房
- Ito, Shuntaro. 伊東俊太郎 1993. 『十二世紀ルネッサンス』, 東京, 岩波書店
- Kamikawa, Michio. 上川通夫 2007. 『日本中世仏教形成史論』, 東京, 校倉書房
- 2008. 『日本中世仏教史料論』, 東京, 吉川弘文館
- 2012. 『日本中世仏教と東アジア世界』, 東京, 塙書房
- Komatsu, Hisao. (ed.) 小松久男 (編) 2000. 『中央ユーラシア史』 (新版世界各国史 4), 東京, 山川出版社
- Moriyasu, Takao. 森安孝夫 2007. 『興亡の世界史 シルクロードと唐帝国』, 東京, 講談社
- 2015. 『東西ウィグルと中央ユーラシア』, 名古屋, 名古屋大学出版会

Sofugawa, Hiroshi. / Yoshida, Yutaka. (eds.) 曾布川寛・吉田豊編 2011. 『ソグド人の美術と言語』, 京都, 臨川書店

Tanabe, Katsumi. / Maeda, Kosaku. (eds.) 田辺勝美・前田耕作(編) 1999. 『世界美術大全集 東洋編15 中央アジア』, 東京, 小学館



国際学会（於サマルカンド）の会場
Venue of International Conference in Samarkand



第2分科会での発表
Presentation at the 2nd subcommittee